

IAUD Newsletter 第2号 (2008年5月号) 目次

1. 特集：IAUD設立に至る道 (2)
「国際UD会議2002開催からIAUD設立まで (前編)」 1
2. コラム：IAUD設立に至る道 (1) に寄せて
「国際UD会議2002発起人からのコメント」 10
3. 松下グループのユニバーサルデザインの取り組み 12
4. Case study: 移動空間プロジェクト
「シームレスインターフェースの実現を目指して」 20
5. 世界のUD動向：米国教育省、カナダ IFA、京都市ほか 25

特集: IAUD 設立に至る道(2) 「国際 UD 会議 2002 開催から IAUD 設立まで(前編)」

(IAUD 設立準備会代表幹事／初代理事長に当時の状況や苦労話を聞く)



ゲスト; 川口光男 (IAUD 理事会相談役／前理事長)

聞き手; 成川匡文 (IAUD 副理事長／情報交流センター所長)

出席者; 川原啓嗣 (IAUD 専務理事／情報交流センター副所長)

川原久美子 (IAUD 事務局長)

成川 ; I AUDの成り立ちに関して、川口さんとの出会いはそもそもどういったものだったのでしょうか。

川口 ; メールマガジン「ゆうまぐ」の第1号にその辺の話を書きましたが、要するに、当時の私にとってUDというのは、ほとんど縁のない言葉であったということです。日立製作所デザイン本部でユニバーサルデザイングループを立ち上げた時も、約1名のUDにこだわりを持ったデザイナー、ご存知の久保田におんぶに抱っこ状態で、彼ひとりが支えているような状況だったですね。私は当時、管理監督側だったわけですが、何かに一生懸命になる人がいればその人を信じてやらせておけばいいやって考えでしたから。



成川 ; なるほどね…面白いですね。私の所属する東京電力なんかもまだ全然ユニヴァーサルデザインのユの字も部署にはなくて、例えば私が3年前に作ったデザインセンターで、その中の仕事のひとつとして、ユニヴァーサルデザインが業務としてやっと入ったような次第です。ところで、前回、古瀬さんとお話させていただいたのですが、川口さんも最初からずっと一緒だったんですか？

川口 ; 一緒と言えば一緒ですが、名前を連ねただけで…先月号の記事で古瀬さんか川原さんが言ったと思いますけど、殿下から企業トップにお声がけいただき、協賛金を集めるというくだりがあったじゃないですか、実はその中に日立は入ってなかったんですよ。日立は殿下のお目に触れない会社でして…（笑）その時に資金集めに奔走していた川原啓嗣さんが、多分、そういえば先輩で動きの軽い川口がいたと…（笑）

川原 ; その頃、大手企業の何人かにご相談したのですが、みんな最初は「ちょっと荷が重いな、どうかな、社長はなんというかな」という感じだったのです。なかなか難しそうなので、結局、殿下自ら、懇意にされている経営トップの方々に直接お手紙を書いて下さった。ところが、唯一、トップダウンじゃなくボトムアップで協賛金500万円を引き出したのが、日立の川口さんだった。

川口 ; というか、まあ、がん首を揃えて来ていただいた時に、前述の久保田の顔が浮かんだわけですよ。うちもそろそろ、ボランティアじゃないけれども、こういう動き（今で言うCSRや社会貢献的な動き）に乗じた方がいいのではないかとか、また、私のところに来られた皆さんの熱い思いに引かれたということもありますね。さらに、当時、特別協賛金として提示された金額は、日立として出せないお金じゃなかったんですよ、そうでしょう？

川原 ; そう言い切れる人はなかなかいない…

川口 ; いやいや、あとは手続きの問題があるじゃないですか。自信があったのは当時の庄山社長がデザインに非常に関心が深かったので、まあ、OKだろうなあ、ってことで行ったところ、本当にOKもらっちゃったもんだから逆にびっくりしちゃったくらいです。

成川 ; 自分が本気になってこれがいいことだと思えば、社長の前に行って500万出してくれって言えるってことですよね。

川口 ; ええ、その代わりに、久保田に全部任せたわけです。そうしたら、500万出したんだから、実行委員に名前を連ねてくれて話が出まして…それで、日立の代表として入ったんですよ。組織委員には庄山社長が入ったのですが、うちは実行委員としても組織委員としても実質の活動は何もできなかったんです。久保田を除いてはね。

成川 ; その実行委員会というのは、何年の？ 国際会議の実行委員会ですか？

川原 ; 2002年。IAUD設立1年前の国際会議の時ですね。

川口 ; 古瀬さん中心に川原啓嗣さんとかいろんな方が殿下のところに行ってたじゃないですか。その時は、僕はあまり行ってないんですよ。

成川 ; 殿下の前で「君たちも金出すんだぞ」という話を、身銭を切るみたいな感じで…と前回うかがいましたが。

川原 ; ええ、初期の発起人の段階で、会社潰すつもりでやれって言われた時ですね。その後になんとかやれそうとなり、富士通の加藤さんとか川口さんとか何人かの方に実行委員に入ってもらった。実行委員とは言っても、川口さんは忙しいからと名義だけで、久保田さんを人質に出してもらって…、松下電器の細山さん（現UD-Unit 主宰）にも出てもらいましたね。

川口 ; その時は、日立デザイン本部のUDグループのメンバーを中心に動かしたんです。ぼくは、お飾りだったわけです。

成川 ; 前回、古瀬さんにも伺ったのですが、2002年横浜で国際会議が成功に終わった時に、既にIAUDを作ろうみたいな話って、みなさんの頭の中にあっただけですかね。

川口 ; それはなかったと思いますよ。日にちは覚えてないんですけど、2002年が終わって、殿下のところへ報告に行ったでしょ…あれいつだっけ？キッド・ステューディオさんでキックオフやったのは？

川原 ; この写真の日付は、3月4日ですね。

川口 ; そうだ。2002年の国際会議が終わって、殿下からその理念と成果を引き継ぐ母体を作ったらってお話があり、有志が何人か集まって、NHKのプロジェクトXから取材があった時のために記念写真を撮っておこうと…（笑）
いや、本当ですよ、本当…



成川 ; その時点で、殿下からそういう母体、つまりIAUDみたいなものを作れというお話があったということですか？

- 川口； そうそう、だからそれがその I A U D 設立に向けた第 1 歩なんですよ。
- 川原； その時に合わせてね、設立趣意書が必要だとか、組織は一体どういう構成になるかという企画書を書きまして、この写真では、それを広げて皆で話し合っているんですね。
- 川口； その時はまだ、おみこしに乗るつもりはなかったんです。
- 川原； そうでしたね。次に日立デザイン本部の青山オフィスに行った時、豪華な弁当出されてね…
- 川口； 断ろうと思ったの…
- 川原； 川口さんは、話を断る時には、豪華な弁当を出すんですよ。
- 川口； 本当に、ウチの秘書が私もびっくりするくらいの豪華な弁当を用意してくれて。あれすごかったね。
- 川原； ええ、すごかったですねー。
- 川口； それでねえ、その時ちょっと、本当にね、UD って…あまり知識もないしね、皆様方から見たら、全く劣るレベルなんで、そんな俺にできるかっていう気持ちがあっただけで、躊躇したんですよ。そしたら、川口はどうも断るようだ、というので、もう 1 回来たんですよ。
- 川原； それが、3 月 27 日、私もあとで調べて分かったんですけど、午前中に川口さんのところに行ったんです。細山さんと加藤さんと私の三人で。あの時、加藤さんはかなり危機感を感じていたようで、つまり川口さんを入れないと、これはうまくいかないぞと。で、川口さんを祭り上げて長にしよう、みたいな。あの時はなぜか素晴らしく勘がよかったのです、加藤さん…
- 川口； そっか、どこかのテロリストみたいな人が来たって話。細山さんのことをね、〇〇〇〇って…うちの秘書が言っていたんですけど、ちょっとヒゲ生やした…
- 川原； その日の夕刻、宮邸に国際会議の報告書を持って、ご報告に行く予定だったんですよ、で、一旦、昼頃に私は事務所に帰って、メールを見たら川口さんのメモが添付してある…備忘録…その時初めてその言葉を知ったので、よく覚えてますよ。
あぁ、川口さんって、仕事が早い人だなあと…。それを持って、宮邸へご報告に行ったら、3 時間みっちり…
- 川口； そんなにかかった？午後 7 時から？
- 川原； 帰って、すぐ皆さんにメールで連絡しています。
- 川口； 本当だ。夜中の 11 時にすごいね。
- 川原； 殿下からは、まず報告書の体裁がなってないとか、あんな新聞記事のコピーをだらだらくっつけるんじゃないと…。最初どうやって立ち上げたのかとか、いつどこで何の会合を開いたか、活動経緯をすべて書くものと、随分叱られました。
そして、いろいろとお尋ねがあったのです。前にも増して大変なことをやろうとして

いるようだが、そのための理念・哲学、熱意があるのかとか、最低10年は続ける覚悟が必要とか、任意団体でも公益的団体でなくてはならないとか…

川口； そうそう、柏朋会は事務局を引き受けられないので、キッド・ステューディオに委せよ、とかね。

川原； その場合、久美子ちゃんが事務局長に専念しなさいと。デザイナーは事務がわかっていないから、宮邸の宮務官や事務官に事務処理のやり方についてレクチャーを受けなさいとか。事務局の業務費はきちんといただくこと、とか。いろいろとありましたよ。

川口； 当初、宮邸にはこの3人で結構行ったんです。規約とかいろんな問題で。その後、殿下に言われたことではっきり覚えているのは、川原はいいから、川口と久美子ちゃん、つまり理事長と事務局長が、毎回きちんと2人で報告に来いと…本当に…規約作りは大変な目にあったね。規約原案を何とか作ったんです。いろんなところの団体なんか勉強してね。

川原； 細山さんが、最初の案を作ってくれて、それにネットで調べていろいろな公益法人の規約を参考にミックスして作ったんですよ。

川口； そしたら殿下から、なっていないと相当怒られたのと、柏朋会の法律顧問だった監事の方を紹介してくれたんですけど、一字一句、訂正されました。さすがに専門家ですよ。

成川； 今ある規約っていうのはそれですか？規約の重みが増すようなお話ですね。

川口； そう、その方の概念は、評議員会と理事会の概念が全く違っててね、うちは評議員会の下に理事会を置いているじゃないですか。社団とか財団とか一般的には、理事会がメインになって、評議員会というのは株主総会みたいな位置付けなんですね。全国、地域ごとに選出されているとかね。

川原； あるいは業界ごとに代表が出て持ち回りで評議員を務めると…大体普通そうなんです。総会の代わりみたいなものですね。

川口； そうですね。ただ、ぼくらはそういう形にしたいくなかったんですよ。まだ全国に大きいネットを張れるような組織じゃなかったのもあってね。しかも、企業がメインにやるので、実質的な機能を持った評議員会にしたいなあという感じだったね。その代わり、執行するのは理事会よ、ってことでしたね。それは最終的に認めてくれたんですよ。

川原； そうでしたね。それまで色んなアイデアがあって、理事会の理事長と、評議員会議長を兼任する案とかもありました。ところが公益団体では兼任は認められないんですね。そうやって、段々と今の形に向かっていった。

成川； 不勉強で申し訳ありませんが、理事会、あるいは評議員会の位置付けはそれぞれ団体によって違うのですか？

川口； ええ、さっき専務理事が言われたように、一般的には評議員会っていうのは理事が提案したものを承認する…って言ったらかおかしいけど、チェックするような機能で、全国に代表を置いてるというような組織らしいんです。それが一般的らしいと。

(一同で過去の資料をみながら)

この時に、理事会っていうのは執行する機関だから、殿下からは細かな人事のご指摘も

いただいた。とにかく、人事も組織も殿下を総裁として掲げる以上、殿下の意向に沿った内容にしなきゃいかんと…。

川原； それはありましたね、柏朋会の監事さんからのご指摘もそこがやはり中心で、君たちが任期を1期か2期務める間は何事もないかもしれないけれど、代変わりした後も、ちゃんとその体制が継続されないといけない。だから規約は重要だと、こんこんと説得されました。

成川； たまたま昨日 IAUD の Web サイトから規約を見たんですけど、そういうお話をお伺いすると、規約もただ何となく作ったわけではなくて、殿下といろいろ話し合いながら、そういう皆さんの熱意がこもった規約なのかなって感じますよ。

川原； 川口さんと一緒に何度も監事さんのところに行きましたね、夏の暑い時ね。チェックはとても厳しくて、それこそ微に入り細なんですよ。こちらも必死で反論しまして…。でも、言うとおりにしておけばよかったと、今になって後悔しています。動議に関する細かい規定なんてのがあったんですけど、それ全部割愛しちゃったんです。だから、今の理事会では動議に対応できないんですよ。大変申し訳なかったなあって思いますね。いかに自分が無知だったかと。



川口； ただその、ぼくはね、理事長をやらせていただいている時にね、公式な場では必ず規約を手元に置いてましたね。規約がないと評議員や理事の皆さんを説得できないんです。規約に、結構細かく書いてありますから。例えば理事、評議員の交代であるとか。それから、規約で決めてないんだけど、準じるようなものは、内規や附則としてね、結構付け加えていきました。なんだっけ、任期の問題…それは内規としてね。例えば、なんかあったじゃないですか、もめて内規作ったのが…

川原久； 評議員の定数、内訳ですね。正会員から何人、準会員から何人、賛助会員から何人っていう。

川原； 準備会の段階で、これは規約に入れよう、ここは内規にしようとか、例えば、口数ですよ。理事の口数、10口っていうのは規約にはちょっと書けないから、内規にしよう。

川口； それから事務局をキッド・ステューディオさんにしようというのも内規に…

川原久； それは内規ではなく、規約に入っています。

川口； 規約の附則じゃなかった？

川原； ええ、それと専任技術スタッフの位置付けかな。後から川口さんが付け加えた事項ですよ。

川口； 当時産まれたばかりですとね、やっぱり規約で動かさないといけないじゃないですか。だから規約には相当こだわりましたよ。

成川； なるほどね。

川原 ; その頃は、川口さんと私が主に、規約作りに日参していて、原案は早くから出てたんですけれど、なかなか決まらなかったんです。なかなかゴーサイン出してくれないんですよ。何度も日参してね。

川原久 ; その附則の案をご覧になって納得されたのか、殿下の方から、もうここらへんで勘弁してやれって、監事の方に…

川口 ; ほんと、でも時間はかかったけど、確かに啓嗣さん言われたように、抜けの部分、入れてた方がよかったっていうのはあるけれども、でもこれが出来て、まあ、動き出せたんですよ、きちっとね。

川原 ; そうですね。なかなか了解してくださらなかった。でも、殿下が乗ってくれないと始まらない話でしょ。それはもうピリピリしてました…

川口 ; 宮邸でのミーティングは、大体、(殿下の) 夕食後の7時からというのが多く、また、さっき言ったように3時間とか4時間という長丁場になるんです、結構ね。それに、ほとんどが言われ放しだから悔しいじゃないですか、こっちも。おっしゃってることは正論だから反論できない、そこからですよ、何かあると必ず終わってビール飲み出した。必ず。どんな遅く終わってもね。

川原 ; 青山一丁目のツインビル地下のライオンに何度通ったことか。

川口 ; 何度通ったことか…

川原久 ; そう、のどがカラカラだし、目の前では反論できないから、終わってから…

川口 ; こちらも言いたいことは一応言うんですが、すんなり通るわけではないんですよ、なにせ相手は殿下なんですから。でも、皇族の一面を拝見できましたし、いろいろ勉強させられましたよ。いろいろね。毎回、お茶菓子にご用達ものが出るんですが、私は甘いものはあんまり好きじゃないので、手を付けずに置いてたんです。そしたら久美子さんに怒られちゃって、出されたものはちゃんと食べなきゃって。でも、話している間は食べられないでしょう。だから、殿下が席を外している間に食べるんですとか、食べなかったら懐紙に包んで持って帰るものですか、久美子さんがいろいろ注意するの。しょうがねえなあと思って、ティッシュにつまんで持って帰ってね、亡くなったおばあちゃん、一緒に住んでたんで、それ見せたらね、ぐちゃぐちゃになった小さな饅頭に、身体曲げて手を合わせて拝んで、家族5人だから5等分してさあ、これぐらいすごいものなんだと後からつくづく思ったものです…

成川 ; めったに経験できないですよ。私も宮邸に伺って殿下とお話したときに和菓子が出て、こういうのが出るんだと、家に持ち帰って家内に見せてやろうって思いましたよ。

川口 ; こういうエピソードはいっぱいありますね。夏場は水菓子みたいなものが出るんですよ。長時間いると、2回くらい出たりするんですが、ある時、竹筒に入ったわけ分からんものが出て来た。それで女官の方に、「すいません、どうやって食べるんですか？」って、お聞きしたんです。端を叩いたらとスルッと出てくる、あれは水ようかんでしたっけね。そうやって足繁く通うようになって、少しずつ信頼を得られたっていうのでしょうか。とにかく、必死で通っていましたね。

そこから今度ね、具体的な指示がいっぱい出たんですよ。例えば150社ぐらいは集めなさいって。数だけではないと思うんですけど、殿下を総裁にかつぐ以上は、ある程度の

規模も必要かなってね。山本会長とか戸田議長にいろいろご相談した時、特に山本会長から、殿下に恥をかかせないような体制作りをやらなきゃいかんと。となるとやっぱり数は150ぐらいを目処にってことになった。それからもうひとつは、産業をまたぐ組織にしないと、電気だけで作っちゃったら、本当に電気業界の団体と何も変わらないようになっちゃうんでね。そこから、幹事会を作って、各幹事にいろんなノルマを決めさせてもらったんですよ。会員勧誘の一覧表を作ってね。何十ページもある表を作りましたよね。担当決めて、誰が何社担当するんだっていう風に。

成川； それはもうすでに、IAUD設立に向けての幹事会みたいなものですか？

川口； そうです。最初は確か準備委員会ですね。準備委員会から幹事会になった。それで、第1回幹事会を富士通さんでやらせていただいたんですよ。

成川； 2003年？

川原久； 2003年の7月14日。

川口； それはだから本当にIAUDを作ろうって動き出したのが、その日だよ、7月14日。

成川； 幹事会って何人くらいいらしたんですか？

川原久； それはもう理事のほとんどが。20人くらいは。

川口； もっといたよ。主婦連の場所をお借りしてやったよね、あれは幹事会だよねえ？

川原； 名称は「設立準備会」ですね。1回目が7月14日で、主婦連（主婦会館）は3回目で11月6日です。

川口； あの時、東京電力の泉名さんとか皆さん出ていただいたのを覚えています。で、泉名さんが上長連れて来られたんですよ。会社としても認めてくれたって意思表示でもあったのかな。

川原； 東電さんをお願いに行ったじゃないですか。

川原久； 銀座のテプコの責任者の方でした。

成川； 暮らしのラボの所長ですね。その設立準備会っていうのは、順調に進んでたんですかね？

川口； 富士通さんで開催した第1回設立準備会ではさすがにぼくもちょっと不安で、要するに初めての仕切りなんですよ、祭り上げられて。他の人もぼくが代表って、わずか数人しか知らないんですよ。最初全部自己紹介してもらって、私がこういうことで、代表として進めさせていただきますという了解を、多分、この時に取ったと思うんですよ。

川原； その第1回の時は、なんとか皆なで一致団結し協力しようという雰囲気でした。

川口； 懇親会で飲んだ後、2次会まで行くような、結構盛り上がりました。殿下を求心力とした熱いパワーというか…そういう感じでしたね。

成川 ; 殿下が発信元となって、みんな賛同して企業で集まってきて、組織化しましょうということで、総論としてはみんな反対することはないでしょうね。

川口 ; そうなんです。ここに殿下がいなかったら多分、無理ですね、これだけ業種が異なり、なお、同じ業種でも競合メーカーが同じ土俵に乗るんですから、啓嗣さんが後で言っていたけれど、海外の人から見たらこれは有り得ない、海外では有り得ない組織だと…

成川 ; 確かにある意味難しいところはありますよね。一緒にやる部分と競争する部分というのは。言うのは簡単だけど、へたしたらなんでもないもの、当たり障りのないものしか出てこないっていうのがよくあるんですよ。



川口 ; それはね、当時かなり取材を受けたのですが、そのときにもっとも多かった質問で、それに対する答えとしては、要するにプラットフォーム作りなんだと説明しましたね。まず共通の場としてプラットフォームを作り、その上で競争するんだと…そんな話をし続けてきましたね。一連のプロジェクト活動の成果がプラットフォームにあたるわけですが、最も定量的なものはUDマトリックスかな。そして、会社基準を社会基準へともずっと言い続けていたのです。みんな会社基準の中で競争していたので、日本全体のUDのレベルが上がっていかない。それから、これは参議院（参議院国民生活・経済に関する調査会テーマ「ユニバーサル社会の形成促進」における参考人としての意見陳述）でも話したんですけど、日本の企業はどうしても社会基準とか、世界基準に向けての発信がないじゃないですか？自分だけで、これでいいだろうな、っていう狭い世界の中でずっと生きてきた。それをもうちょっと枠を広げて、日本発世界へという意識で、国際ユニバーサルデザイン協議会という名称にしたんです。

川原 ; 最初は、「日本ユニバーサルデザイン協議会」という案も候補にありました。しかし、国際的な活動を目指すのだから「国際」にしよう、確か戸田さんも同様のことをおっしゃっていたような…

成川 ; 実は私も初めて聞いた時は違和感がありました。「国際」と名乗っているけれどどういう意図なんだろうって。

川口 ; 9月30日の記者発表用のQ&A作成でも、当日まで悩んだんですよ。今でも覚えてますが、貴賓室で殿下をお待ちしている時に山本さんがずばり言ってくれたんですよ。国際「化」じゃないんだ、国際的に、グローバルに発信するんだと…

-----後編は次号 IAUD Newsletter No.3（6月号）で-----

コラム：IAUD 設立に至る道(1)に寄せて ～国際UD会議2002 発起人からのコメント～

あのころを思い返して

一級建築士事務所 アクセス プロジェクト主宰
川内 美彦

ニューズレターのご発刊、おめでとうございます。この機に 2002 年の国際会議のことを思い返してみましたが、何もお役に立てなかったということしか残っていません。

古瀬さんや川原さんのインタビュー記事にあるように、確かにいろいろなことがありましたし、そこに自分はいたのでしょうけれども、それまで個人としていろいろな活動をおこなってきた者としては、組織としての意思決定の流れや仕事の進め方、組織相互の価値観や考え方の違いを調整しつつ作業を進めていくやり方などに戸惑い続けていたという記憶が最も強くあります。

夜、殿下のお宅での会議を終え、その会議で出たたくさんの課題をどうするのだろうかと考えながらお屋敷の中を歩いたことが思い出されます。私個人では考えも及ばないその答えを見つけ出し、実行していく様子に接して、自分が何も貢献できない肩身の狭さ、自分がこの中にいることの意味などをいろいろ考える日々でした。その時点でユニバーサル・デザインは既に理念から実践の段階に進んで行っており、私自身もこの会議に向けた日々を通じて、その後何をすべきかを考えさせられたものでした。

ともかくあの会議を機に、IAUD というユニバーサル・デザインを縁にした世界にもなかなか見ることのできない企業の大連携ができたわけですから、そこまで推し進められた関係の方々のご尽力には敬服するばかりです。

ユニバーサル・デザインの基本はユーザーのニーズを掘り下げ、尊重していくことだと思います。IAUD が、多様なユーザーとの幅広く徹底した連携、協働によって新たなデザインの扉を開いていくことを期待しますし、IAUD に集っている人たちの力をもってすれば、それはそれほど難しいことではないだろうと思っています。

株式会社ユーディット(情報のユニバーサルデザイン研究所)
代表取締役 関根千佳

「国際 UD 会議 2002 開催の経緯」を、大変なつかしい思いで拝見いたしました。日本の企業にとって、おそらく初めての UD 世界デビューだったのだなあと、改めて、UD2002 の果たした役割を思い起こしました。

私が、98 年の横浜の UD フォーラムに参加させていただいたのは、情報の UD を推進するために、ユーディットを設立した直後でした。この会は、私にとっては世界中の UD 研究者に一度に会えた素晴らしい機会であり、その後、各国の UD を知るため世界一周をさせていただききっかけにもなりました。日本の社会にとっても、まさにこの会を契機に、UD が芽吹いたといえるでしょう。しかし、それはまだ芽吹いただけで、ひよわな状態でした。バリアフリーを経験していない日本の社会に、UD の概念が根付くのは容易ではなかったのです。

当時、米国のリハビリテーション法 508 条の改定などを始め、世界はどんどん動いていました。日本の企業や政府は、世界の動きをきちんと知る必要があったのです。また、多様な当事者自身が UD を推進している各国の現状を知れば知るほど、UD をもう一度、実践者から直接、日本の多様な市民に伝え、情報交換をすることが重要だと感じていました。ですから、日本で 2002 年に再び開催される可能性があると感じたとき、大変嬉しかったのを覚えています。その後は、事務局内部の葛藤などいろいろありましたが、最後は川原さんご夫妻を始めとする運営委員会のみなさんのご尽力で、ようやく乗り切ったという感じですね。今となっては、あの赤坂の宮邸での大激論も、なつかしい思い出です。

あれから 6 年。IAUD の活動は活発ですし、内閣府の指針も、ついにバリアフリー・ユニバーサルデザインを併記するところまで来ました。多くの JIS 規格も生まれ、認知度も高まっています。ずいぶん進んだといえるかもしれません。しかし、私が望む UD な社会は、まだ遠いところにあります。子育て中の両親を社会全体で支える仕組みや、高齢者医療への信頼など、誰もが生きやすい状況とはいえないのです。企業の中の UD への理解も、皮相的なものにとどまっていて、多様な当事者のちいさな声に、真摯に耳を傾けているとは思えないところも散見されます。がんばっているところでも、トップから販売店まで、UD の精神が浸透しているとは、まだいえないかもしれません。教育や就労など、社会全体のインフラが、多様性(ダイバーシティ)を前提としていないため、UD の目指すインクルーシブな社会になりきれていないのです。国連の権利条約の批准を前に、もう一度、社会全体を見直す必要性を感じます。

これからの IAUD が、企業はもちろん、政府や研究機関、多様な市民グループなど、社会全体を巻き込んだ、大きな運動体となることを期待します。それは、UD の未来、我々自身の未来のためなのですから。

松下グループのユニバーサルデザインの取り組み

松下電器産業株式会社 パナソニックデザイン社
(国際ユニヴァーサルデザイン協議会 理事) 根岸 豊 2008年5月

●はじめに

現在、日本をはじめとする多くの国が、これまで経験したことのない様な高齢化社会を迎えようとしています。松下グループは人々の暮らしを便利で快適にするための商品やサービスを提供しており、高齢者や障がいをお持ちの方々にも満足して使用していただくために、ユニバーサルデザイン（UD）活動を重要な全社的取り組みテーマとして推進しています。

今回のニュースレターの寄稿にあたり当社の UD の考え方と今までの活動事例および研究事例をご紹介します、活動に対するご理解を深めていただければ幸いです。

●松下グループの UD 方針と基本要素

松下グループは、創業以来「お客様第一」を経営理念の基本とし、お客様のご意見を積極的に伺いながら人にやさしいものづくりを進めて参りました。1990年の「人にやさしい商品づくり」活動や1994年の「バリアフリー推進」など、時代の変化に対応し、使いやすさに配慮した商品作りに取り組んできました。

2003年には、高まる社会的要請を受け、全社的なUD推進体制を設けるとともに、「UD方針」とそれを実現するための6つの「基本要素」を制定しました。（図1）



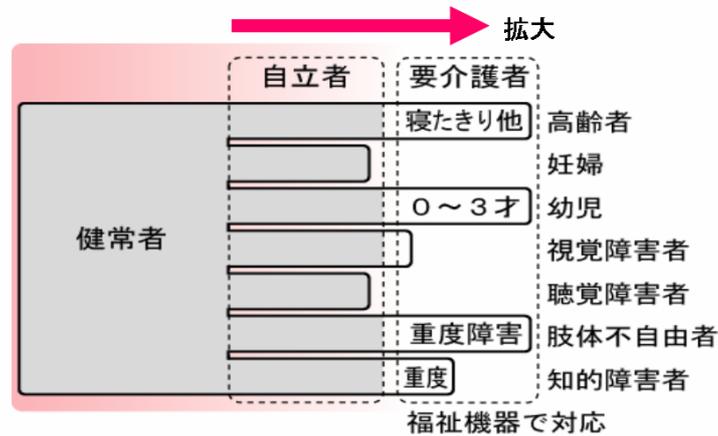
（図1. UD 方針と基本要素）

「UD 方針」にもある通り、松下の UD は、高齢者や障がいを持つ特定のお客様に対して、特別な商品で個々に対応するのではなく、できるだけ多くのお客様に満足していただける商品づくりを目指しています。この実現のため、主力商品の商品力強化のポイントとして「UD」を義務付けると共に、全ての商品分野・全ての職能で UD 開発を追求する体制をつくり、実践しています。

「基本要素」は、「理解しやすい操作への心配り」「わかりやすい表示と表現への心配り」「楽な姿勢と動作への心配り」「移動と空間への心配り」「安心・安全への心配り」「使用環境への心配り」の6つとしました。ロナルド・メイイス氏の提唱した「UDの7原則」に基づき、松下グループの事業特性にあわせて制定したものです。この6要素に基づいて更に具体的な基準やコンセプトを制定し、指標にしています。

また、松下グループでは「人にやさしいものづくり」をより明確にするために、UDのアプローチを定めています。（図2）これは、健常者を含め自立して生活できる高齢者や障がいをお持ち

このユーザーをターゲットとして開発、それをより多くの人に向けて拡大していくアプローチにより、全ての商品のUD化を目指すものです。また介護が必要なユーザーには、それぞれの状況に合わせた福祉機器を開発して対応し、その結果得た様々な研究成果をUD商品にフィードバックするアプローチも実施しています。



(図 2. UD の対象範囲とアプローチ)

●UD 商品事例紹介

このようなアプローチと「お客様の声」や「生活研究」を通し、様々なアイデアや検証によって生み出されたUD商品と福祉機器の事例を紹介します。

【ビエラリンク】

ご家庭で臨場感のある映像や音楽を楽しむため、テレビ、DVDレコーダー、ホームシアターシステムを組みあわせて使用されるお客様が増えています。これまでは、複雑な結線をし、それぞれの機器をそれぞれのリモコンで操作するという、大変面倒な手順が必要でした。

ビエラリンクは結線を簡単にし、ビエラ（テレビ）のリモコン一つで「録る」「見る」「聴く」が簡単に操作できるようにしました。これによりリモコンの操作回数が減るだけでなく、特に高齢の方にわかりにくかった「入力切替」の操作も不要になりました。

また、ディーガ（DVDレコーダー）での再生時には、ビエラの画面上にリモコンの操作ボタンを表示。基本操作を画面で見ながら、ビエラのリモコンで簡単にディーガを操作できます。

これにより、今までDVDの再生操作に戸惑っていたお客様も操作できるようになりました。



(図 3. ビエラリンク)

【エアコン エアロボ】

エアコンの面倒なフィルター掃除を、お掃除ロボットが自動的にやってくれます。危険性が伴う脚立での高所作業からも解放されました。

また、新・気流ロボットによる「快適おまかせ」運転で、部屋の環境や、人の動きまで判断。暖めすぎ、冷やしすぎを抑えて、快適冷暖を実現することで、複雑なリモコンの操作を軽減しました。結果として省エネも実現しました。(図4)



(図4. エアコン エアロボ)

【全自動トイレ アラウーノ】

毎日使うトイレはいつも清潔にしたいものですが、腰を屈めながらの清掃は大変です。

アラウーノは、「長期間使っていただく」ことを前提に、従来の素材や構造を見直し、有機ガラス系新素材の開発と、便器の凸凹やスキマを最大限になくす工夫により、汚れが付きにくく、汚れても簡単に落とせる「トイレを使う度にキレイになる」という今までにないトイレを生み出しました。(図5)



完全一体型で便座と便器の間隙がなくお手入れが楽。汚れても一気にふき取れます

(図5. 全自動トイレ アラウーノ)

【ものしりトーク】

手に取ったものが何か、声で教えてくれる「ものしりトーク」。

知りたい物や情報を、いつでも何度でも聞くことができ、登録も簡単。自分の声で繰り返し登録できます。小型で持ち運びもラクラク。

視覚障がいユーザを対象に開発されたものですが、ICタグリーダーとして視覚障がいのないユーザもコミュニケーションツールとして使用できます。(図6)



(図6. ものしりトーク)

【レッツチャット】

松下電器の社内ベンチャー企業「ファンコム株式会社」が開発/販売している「レッツ・チャット」は、声を出すことや腕や手を動かすことが困難な、言語障がい者・上肢障がい者の方が、指先や足先ひとつ・頬や唇の動きなどでコミュニケーションできるように開発された携帯用会話補助装置です。キーボードや操作ハンドルではなく、たったひとつのボタンでしか操作できない方のために、開発されました。

操作は、順番に点滅する文字盤の文字グループを手元ボタンで選択、選択された文字グループの中の文字がさらに順番に点滅し、その中から一文字ずつ選択することを繰り返して行います。

これは重度障がいを持つ方のコミュニケーションの可能性を大きく広げる製品として注目され、厚生労働省の給付制度対象品目としても認定されました。(図7)



(図7. レッツチャット)

【包装・取扱説明書】

包装や取扱説明書でも、ユニバーサルデザイン視点からの取り組みを行っています。開封しやすく製品が取り出しやすい工夫や、保管や分解・廃棄がしやすいようにしています。「取扱説明書は、読むのがつらい・・・」そんなお客様の声に反映し、雑誌感覚で思わず見たくなる/使い方が見てわかる/知りたいことがわかりやすい取扱説明書にしました。(図8)



開封しやすく新旧の
区別もわかりやすい



上方向から商品が
取り出しやすい



コンパクトになり、
保管や廃棄がしやすい



見なくなる雑誌感覚



使い方が見てわかる



(図8. 包装・取扱説明書)

● ユニバーサルデザインの実現に向けた研究

「使いにくさ」を知って始めて「使いやすさ」がわかります。
その研究の一部を紹介します。

【白内障疑似体験ゴーグルの開発】

白内障は、加齢ともなって眼球の水晶体が白濁する現象で、60歳以上の方では70%がかかるといわれています。

私たちは、高齢者で白内障にかかった方が実際にどのように見えているかを眼科医と共同調査し、白内障の方の見え方が高い精度で疑似体験できるゴーグルを開発し、社内の各部署で活用しています。これにより、若い担当者も高齢者の立場に立って、製品の表示やカタログ、パッケージ、取扱い説明書などの見やすさの検証や改良を行っています。(図9)

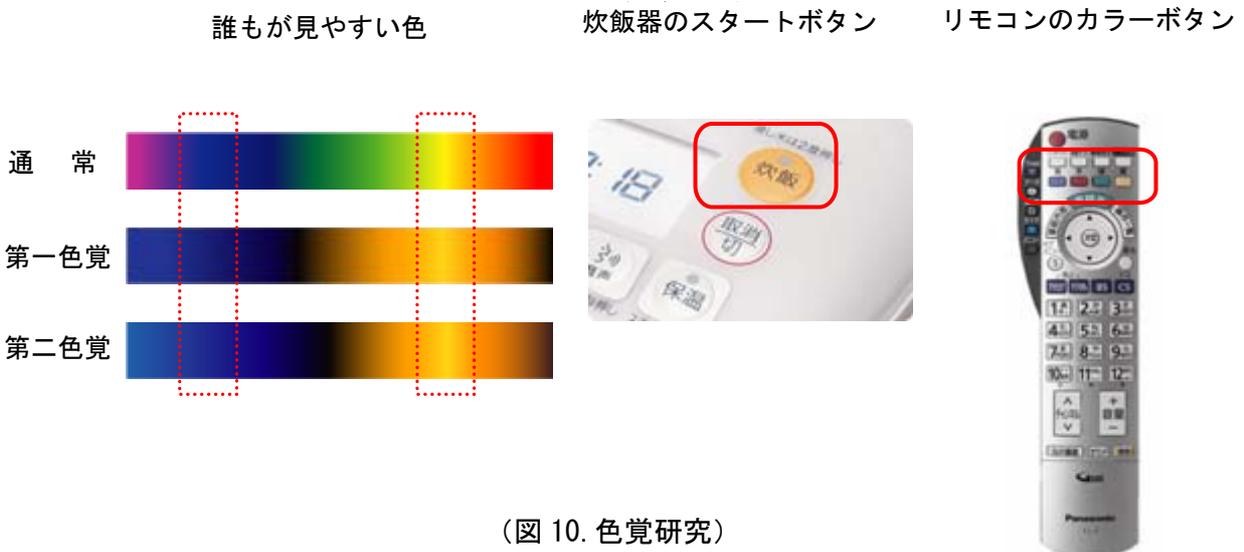


(図9. 白内障疑似体験ゴーグル)

【色覚研究】

色見え方が一般と異なる色覚特性者の数は、日本人では男性の「20人にひとり」といわれています。私たちは、専門の研究機関と様々な色覚特性を持つ方々の実際の見え方を共同で研究してきました。

そして、色覚特性者の中でも、特に比率の高い第一色覚と第二色覚の方が同じように認識できる明るい黄色を、家事・調理関連の家電製品のスタートボタン色として使用しました。また、機能選択や設定などに使うビエラリモコンのカラーボタンも、色覚特性に配慮した見やすい配色を提案し、カラーユニバーサルデザイン研究所の認証を受けています。(図10)



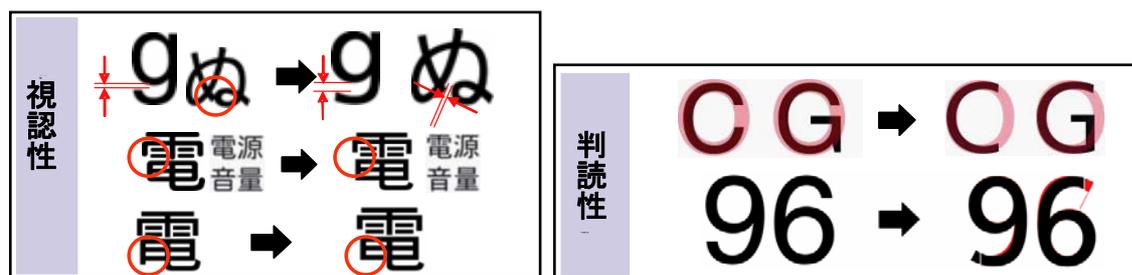
(図10. 色覚研究)

【フォント研究】

様々な環境下で使用される商品の表示書体について、既存の書体をUD視点で高齢者を始め、様々なユーザーに調査を行いました。その分析の結果、文字の大きさや背景とのコントラストのほかに、書体のデザインもわかりやすさに大きく影響することがわかりました。

評価に大きく関わる要素である「視認性」、「判読性」、「デザイン性」、「可読性」向上の観点から具体的な書体デザインの改善提案を行い、株式会社イワタと協働で新しいフォント「PUD フォント」を開発しました。開発段階では、高齢者や外国人の方を含む幅広いユーザーに対して検証を行うと共に、識者や現場へのヒアリングを行い書体改善の要望を吸収し、改善を繰り返しました。(図 11) 更に新書体を商品に印刷した状態で検証を行い、優位性を確認し 2006 年以降発売の松下製品に採用しています。

この「PUD フォント」は、株式会社イワタから「イワタ UD フォント」として市販されています。



(図 11. フォント研究)

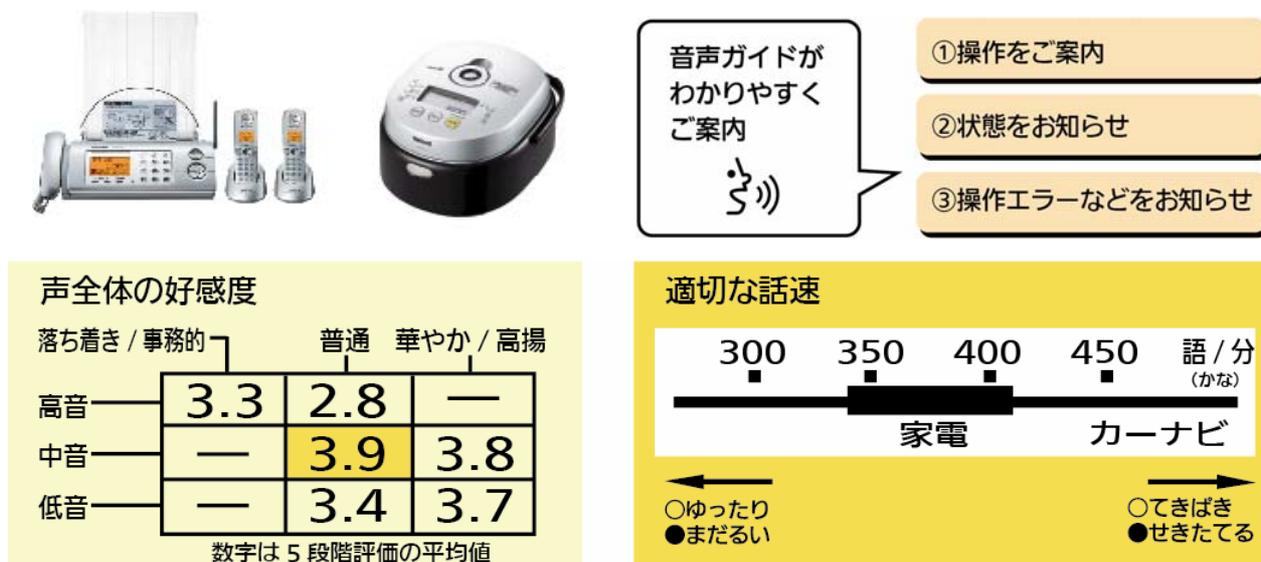
【聞き取りやすさ研究】

パネル表示など視覚だけでは、機器の状態などが十分に伝えることが出来ない場合があります。例えば「エラー表示」が出ても、「何の記号なのか?」「なぜ動かないのか?」がわかりにくいといったことです。

そこで、機器の状態や操作手順などを、音声でわかりやすくお知らせすることで多くの方々に使っていただけるようにしました。

「音声案内」は、より多くの方に情報を伝える有効な手段となっています。

しかし、数値的に示すことができにくく何らかの指標化が必須と考え、生活感覚・経験などを基に検証しながら、音声ガイドの指標化(好感度、話速、内容・表現、文の長さなど)を行った結果、聞き取りやすい音質と、「音声案内」を搭載した商品の創出を実現しました。(図 12)



(図 12. 聞き取りやすさ研究)

● 松下グループの研究組織

商品を使うお客様を明確に想定し、お客様の特性及び利用状況を把握して、商品の開発の各段階で確認・検証を行う活動が必要です。紹介致しました研究事例は、それぞれの商品特性に応じて研究～商品化への確認を3拠点で行っています。

【ユーザビリティ検証ラボ】

一般生活者の声を商品づくりに反映させ、市場での満足度向上を図るためにパナモニター（主婦）をメインに、高齢者・大学生・障がい者対象のユーザーテストに協力いただけるネットワークを構築。一般公募で採用した京阪神・首都圏在住の20～60歳代の主婦約310名に登録いただいています。（図13）



（図13. ユーザビリティ検証ラボ）

【くらし研究所】

冷蔵庫や洗濯機などのいわゆる白物家電の使いやすさについて調査と研究を行っています。企画段階から販売中の製品まで、さまざまな段階で使用テストや検証を行います。それらは、新たな商品コンセプトや使用目標、また生活者視点で見た審査結果として、事業部の担当者に伝えられ改善されるという仕組みになっています。一人暮らし、大家族、あるいはホームパーティのときなど、使われる状況をさまざまに想定して検証しています。（図14）



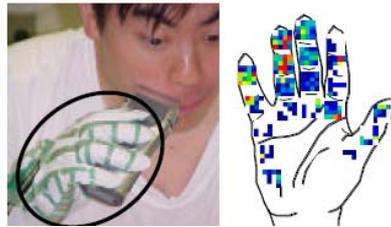
（図14. くらし研究所）

【松下電工解析センター】

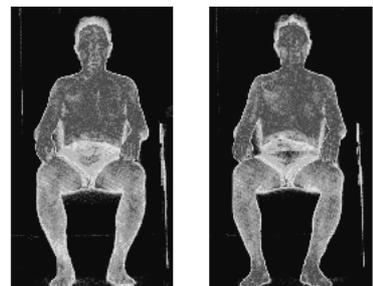
あいまいな人間の心理や心地感を解明するための人間工学に基づく統計解析や各種生体計測技術で、商品企画から妥当性検証までを可視化・定量化しています。（図15）



<実使用調査>



<圧力分布測定>



<熱画像計測>

（図15. 松下電工解析センター）

● ユニバーサルデザインを知らせる活動

ユニバーサルデザイン配慮商品を意外にご存知ないお客様が多いようです。わたしたちは、「人にやさしいものづくり」をテーマに、より多くのお客様に知って頂く活動に取り組んでいます。(図16, 図17)



(図 16. パナソニックセンター)



報知音研究

UDフォント研究

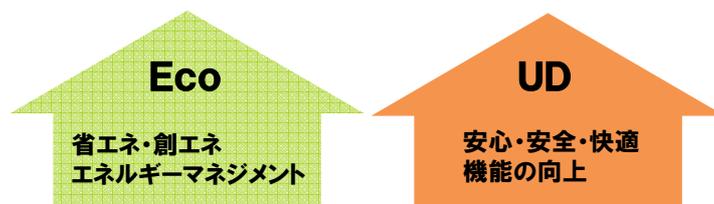
ボタンピッチ研究

(図 17. 新聞での活動紹介)

● 最後に

以上、松下グループのUDの考え方と事例を紹介いたしました。当社では、UDだけではなく、ECO（地球環境との共存）も含め、「人」と「環境」にやさしい商品づくりという社会的要求に応えるとともに社会共生型商品づくりに取り組んでいます。

今後とも、松下グループはお客様の視点に立ち、エコとユニバーサルデザインを重視した商品開発に取り組んでまいります。



松下グループのユニバーサルデザイン <http://panasonic.co.jp/ud/>

Case study: 移動空間プロジェクト

シームレスインターフェースの実現を目指して

「クルマの運転はできるけれど、教習所で習っていない操作に戸惑うことがある。」という声を聞いたことはありませんか？

クルマの操作系を大きく3つに分類すると「運転系」、「内装系」、「装備系」に分けられますが、この場合の習っていない操作とは、最後の「装備系」に属する部分、つまり、カーエアコン・カーナビ・カーオーディオなどを言います。車内で快適に過ごす為のものですが、電装機器類ということで操作が複雑だと思う人が多いようです。

● “慣れ”に着目

クルマを運転することは生活の中の1シーンです。朝起きてから夜寝るまでの間に、家庭・オフィス・クルマなど様々な環境の中で我々は生活をしています。

このように生活自体を俯瞰してみますと、クルマの中で過ごす時間はそう多くありません。

そこで我々は「慣れ」というキーワードに着目いたしました。

車の中でのエアコン・オーディオ操作よりも、家庭の中でのエアコン・オーディオ操作の方が慣れているのではないのでしょうか？そこで家庭での操作系の考え方をクルマの中に持ち込むことをイメージしてみました。

こちらはエアコンを「起動させる」という行為についての観察です。

ホームエアコンは必要に応じてユーザーが主電源をONします。

ところがカーエアコンはほとんどの場合、エンジンを掛けると同時にエアコンもONの状態になります。当たり前のことのように思われる方もいらっしゃるかと思いますが、

ON/OFFの作法が違うという事は非常に大きな違いといえます。



●クルマと家電は何がどのように違うのでしょうか？

このように何がどのように違うのか観察する中で、我々は4つのキーワードを挙げました。

それは、「作法・かたち・表記・色」です。この4つのキーワードを元に、クルマと家電のデザイン比較をしました。これは良し悪しを判断するものではなく、違いを見つける比較です。それぞれ具体例をあげます。



・ 先ず最初に「作法」です。

クルマのエアコンは、目的を達成する為のオペレーション（吹出口・風量・温度などの調整）をもとにした使い方をするのに対し家庭のエアコンは、ダイレクトに目的（冷房・暖房・除湿）を選択して使います。

① 作法編



・ 次に「かたち」です。

クルマは、凹と凸がセットになったスイッチのように、指先の感触のみで判断することができます。一方家庭のスイッチは、平板な形状です。一つ一つのスイッチは大きく、スイッチ同士の間隔が広くとられ誤作動を防止する役割を果たしています。

② かたち編



・ 三つ目に「表記」です。

まず、どう表記するか？の違いです。クルマは、英語表記で文字が光ります。家電は、日本語表記で印刷文字です。

③ 表記編



④ 色

・最後に「色」の比較です。
クルマの色使いは、モノトーン基調、一方家電は、機能を色分けしています。



●「四つの違い」の仮説

このような観察のもと、私たちはある仮説を立てました。それは「クルマと家庭の4つの違いを出来る限り共通化すれば、より使いやすく・分かりやすくなる。」というものです。

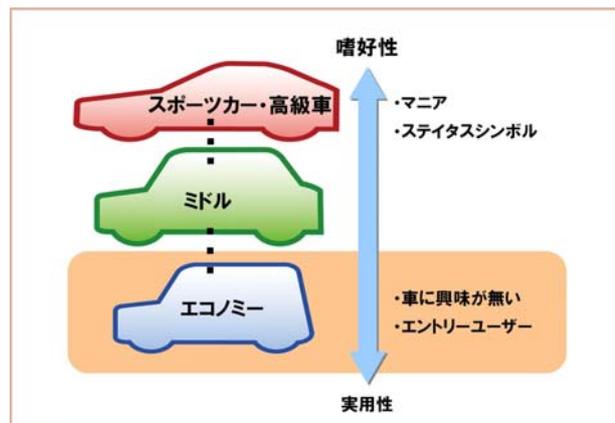


●クルマとユーザーの関係

同時にその仮説を取り巻く環境を整理してみることにしました。

まずこの仮説のターゲットを確認します。概ねクルマは三つに分類されます。

「スポーツカー・高級車」は嗜好性が高く、通常走行以上の性能や品位を求められるステイタス的存在です。ユーザーの多くはクルマ好きな方たちで、操作系など、熟知して乗られていると考えます。一方で「エコノミー」は、実用性を重視し、移動の道具としてクルマを利用する方が多く、全ての人が操作系を熟知しているとは限りません。「ミドル」はその中間です。



先ほどの「4つの違い」の仮説は、この実用志向ゾーンのクルマのユーザーの「ここが使いにくい！分からない！」をターゲットとしたものです。

それに加えて、装備系を取り巻くユーザビリティについて整理をしました。

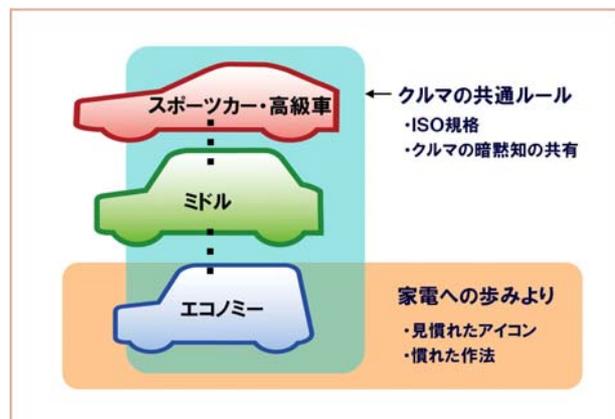
●クルマの共通ルールと家電への歩みより

1つ目は「クルマの共通ルール」です。

ISO規格やクルマにおける暗黙知、といったものは咄嗟の判断操作を促すものとしてスポーツカーであれエコノミーであれ備えていなければなりません。

よって、配置などに関しては、クルマ特有の共通ルールが必要と思われます。

2つ目は、「家電との“共通化”ではなく“歩み



より」]が大切であるという事です。

我々の当初の仮説では共通化を謳っておりましたが、「クルマの共通ルール」を鑑みた上で、「歩みより」がよりふさわしい表現なのではないかという結論に至りました。

(今回、この仮説を俯瞰するにあたっては、ユーザビリティの専門家で早稲田大学にて人間生活工学を推進しておられます小松原教授にアドバイスをいただきました。)

●仮説の検証

このようにして立てた仮説が正しいのかを確認する為、ターゲット像に近い方にインタビューを試みました。クルマが趣味でないなど、ターゲットに合致する条件で絞り、5名の方にインタビューに協力していただきました。

インタビューでは、クルマの内装と家電製品の写真をみながら、それぞれについて思うことと、それら二つを比較して思うことをお聞きしました。

●クルマと家電への生活者の声

・まず作法に関して。最近では家庭用エアコンでも電源がないものがありますが、被験者のほとんどが、まず電源を探していました。

機械の操作はまず電源から、という強い意識があるのかもしれませんが。

・スイッチのかたちについては、

運転中にすることが多い操作は、感覚的に操作できるアナログ形状（レバーやダイヤル）が良いという意見の一方で停車時にじっくり見てみると、なんだか分からないものがついていることに気が付いた。という意見がありました。

分からないもの、必要でなさそうなものは視界から外れているのかもしれませんが。

いずれにせよ運転中の直感操作にはあまり不自由しないものの、視覚から得られる情報にはやや不足があるようです。

・次に、スイッチの色についてです。

家電でもクルマでも、エアコンの温度設定ボタンに赤と青の色が使われていると直感的に操作できる、という声が多くありました。機能色のイメージは非常に強いようです。

またここでも作法の時と同じく、主電源ボタンへのこだわりがありました。

・そして表記について。

日本語表記の方が理解しやすく、親切的印象もある、と感じる人が多いようでした。

数ある意見の中で最も興味深かったのがいままで両者を比べたことがなかった、と答える人が殆どだったということでした。家電とクルマは多くの共通した機能を持っているにも関わらず、全く別物と捉えているようです。

そして、インタビューに答えてくださった方の話を丁寧に聞いていくと、家電、クルマ、それぞれに覚えなければならない操作方法がたくさんあり、結局詳しい操作方法がよく分からないまま何となく使い続けているという人がとても多いことが分かりました。

今回のこの数少ない調査ではどんなデザインを、家電とクルマが共有していくべきなのか、答えを出すことは出来ませんが、家電とクルマの間にある大きな溝を、少しずつ埋めていくことで、誰もがすぐに、確実に使うことが出来るユニヴァーサルデザインに近づくことができるのではないのでしょうか。

●デザインへの提言



これらのことから我々は「シームレスインターフェースの実現」を提言したいと思います。「シームレスインターフェース」とはクルマと家庭の垣根を取り払った継ぎ目の無い操作の習熟を積み重ねることにより、多くの「分からない」「使いづらい」を解決する、という考え方です。

また、これは一方的にクルマが家電製品に歩み寄るのではなく、家電製品もまた、クルマの優れた部分を取り入れ、シームレスな使い勝手を実現しようというものです。

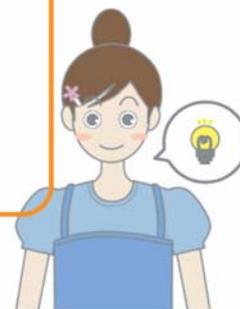
この「シームレスインターフェース」の考え方は、未来のクルマ社会においてもまた役に立つのではないのでしょうか？

現在、クルマはパーソナルな存在ですが、今後は、サステイナブルな視点でのカーシェアリングなど、パブリックな使われ方も多くなってくると思われます。このような使い方も視野に入れた上で「本当の使いやすさとは何か？」を研究する必要があると考えます。

この実現を目指して、クルマと家電が垣根を越えて「どういうモノが本当に使いやすいのか！」を考え、共有化して行くことを始めませんか？

**外・公共
PUBLIC**

- ・カーシェアリング
- ・レンタカー
- ・パーク&ライド
- ・高齢化する
ユーザーへの配慮



クルマと家電の垣根を越えて、
「本当に使いやすいもの」を
みんなで考えてみませんか？
デザインへの提言

● 報告を終えて

発表後は、多くの会員の方々より予想以上の反響があり、使いやすさに対しての関心の高さを改めて実感いたしました、同時に、提言である共有化推進の重要性及び実現の難しさ、また、海外に向けての活動要望などさまざまなご意見もいただきました。

皆様のご意見等を真摯に受け止め、プロジェクトとして次の一步を踏み出すべく検討を進めてまいります。会員企業様からの更なるご協力をお願いすると共に、この活動を通じて各企業様のユニバーサルデザイン取組みに拍車がかかる事を願っております



世界の UD 動向

米国教育省 緊急事態管理研究と障害者について リソースガイド（2008年4月発行）

2002年と2006年の国際会議に講演者としてお招きしたエドウィナ・ジュイエ氏より情報をいただきました。約70ページのガイド原文（英語）は、下記をご参照ください。

<http://www.ed.gov/rschstat/research/pubs>

イントロダクション、及び目次だけ下記にご紹介いたします。

はじめに

国立障害・リハビリテーション研究所（NIDRR）は、緊急事態管理に関する研究と障害者に関するリソースガイドをオンラインでお届けできることを嬉しく思います。本ガイドは、NIDRR、教育省、緊急事態準備と障害者に関する関係省間調整委員会研究小委員会（ICC）と障害者研究関係省間委員会の新開放戦略小委員会（ICDR）の共同作業によるものです。

本ガイドは、連邦政府・非連邦政府機関援助による研究プロジェクト一覧および詳細、緊急事態管理と障害者についての会議で発表された研究提案、および関連する研究の出版目録で構成されます。

連邦政府機関の多くが研究プロジェクトや会議勧告の認定に参加し、緊急事態管理と障害者に特化した、16連邦政府機関と4非連邦政府機関の援助研究プロジェクトを立ち上げました。会議勧告には埋められない認識のギャップが多くみられ、今後の研究が待たれます。

目次

研究プロジェクト

- ・連邦政府援助研究
 - ・障害者の緊急警報へのアクセス
 - ・地方局テレビスクリーン情報へのアクセス：緊急放送時の聴覚者向け伝達とタイトルについて
 - ・ハリケーン・カトリーナが障害者にもたらした影響評価
 - ・歩行者集団の流れのボトムアップのモデル化：障害者の効果的脱出方法
 - ・不利なコミュニティへの緊急事態準備の実証プログラム
 - ・災害弱者への緊急事態準備

- ・皆がアクセス可能な緊急事態準備トレーニングソフト
- ・災害時における障害者の避難方法と行動理解：危機管理法の青写真
- ・飛行中の通信と娯楽へのアクセスを可能にする
- ・国立障害者協会（NOD）の緊急事態準備研究2004
- ・誰も取り残されない：動作障害者への災害対応準備
- ・安全EV-ACプロジェクト：障害者の安全な避難と宿泊施設
- ・無線技術についてのリハビリテーション工学研究センター
- ・電信アクセスに関するリハビリテーション工学研究センター
- ・救命：危機管理時の障害者を含む
- ・音声警告：緊急時音声を聞くことができない聴覚に障害を持つ人たちのための警報中央化システム
- ・非連邦政府援助研究
 - ・ハリス世論調査#60：テロリストからの攻撃や災害に備えのない多くの人たち
 - ・ハリス世論調査#60の追跡調査2003年12月：新規調査では障害を持つ人たちへからの更なる危機管理計画の必要性を強調
 - ・国内調査：緊急事態への準備と通信アクセス：9.11に学んだこと及び提案
 - ・NOD/緊急事態準備についてのハリス調査：障害者の職場における準備が減少- 各人の準備は増加

緊急時管理と障害者会議からの研究提案

- ・緊急情報へのアクセスと通信：科学会議事情
- ・障害者への緊急事態準備会議
- ・緊急事態準備の考察：2分科会議
- ・障害者の建物内からの緊急退避
- ・災害やテロに対する歩行時の準備：国内コンセンサス会議
- ・火災時の建物内住人の移動に関するワークショップ

付則A：執行部命令13347：緊急事態準備における障害者

付則B：「緊急事態準備における障害者、執行部命令13347：年次報告(2005年7月)」抜粋

付則C：「緊急時準備における障害者、執行部命令13347、2005-06年プログレスレポート」抜粋

付則D：関係省庁協力者名簿

付則E：方法論について

参考文献一覧

第9回高齢化に関する地球会議 ～続報～

(IFA's 9th Global Conference on Ageing)

2008年9月4日～7日

シンポジウム、ワークショップ、ポスターセッション、論文のアブストラクトの締切りは5月30日に延長されました。

なお、基調講演者に、静岡県知事の石川嘉延氏、そしてアダプティブ・エンバイロメントのヴァレリー・フレッチャー氏その他が予定されています。

詳細は、www.ageingdesignmontreal.ca をご参照ください。



京都市「ユニバーサルデザインアドバイザー」

京都市では、平成18年度から各種団体、学校、企業等におけるユニバーサルデザインの取組を支援するため、必要な助言やコーディネート等を行う、「ユニバーサルデザインアドバイザー」を派遣しています。

詳細は、下記をご参照ください。

<http://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000039424.html>

「UD楽」 ユニバーサルデザインがく発刊のお知らせ

(本書では一般的な表記、ユニバーサルデザインを用いています)

2002年の国際会議から I A U D 設立に関わった細山雅一氏の最新著書、「UD楽」が発刊されました。

「ユニバーサルデザインは不便さの解消だけでは達成されない、美しく楽しくなければならぬ」と言う著者の思いをしたため、そのヒントは「日本文化にあり」と説く。UDに関わる全ての人にこそ一読いただきたい渾身の一冊。

http://www.ud-japan.com/book/ud_gaku.html

前 I A U D 理事長・川口光男氏より

本書は、メーカーのデザイナーであった著者、細山氏の経験を元に、現実に即した身近な事例をもってUDの解説が為されており、非常にわかりやすく、UDの啓発書と言えるであろう。また、彼独特の語り口調がそのまま文章となっているため、読み進むと彼自身が耳元で語ってくれているような錯覚に陥り、彼を少しでもご存知の方であれば、少々気味が悪い(失礼!)と感じるかも知れないが、それほどすんなりと受け入れやすいという不思議な魅力を持った本なのである。付章では、星の好きな彼らしく素敵な短編小説が織り込んである。

これから読む方にはお楽しみとだけ言っておこう。いずれにしろ、著者、細山氏のUDに対する情熱と読む人への配慮が感じ取れる「UD楽」、是非、お勧めしたい。

友人でタレントの稲川淳二氏より

ユニバーサルデザインという言葉聞く機会が近頃、多くなったように思います。どうやら確実に、世間に浸透しつつあるようです。ただ、私の中では、先進国といわれる国々の中では、日本は、少し立ち遅れたかな、といった思いがあるんですが、どっこい、そうとばかりは言えない。日本には日本のユニバーサルデザインがある。と教えてくれたのがこの“UD楽”の一冊。著者が体験したエピソードを織り交ぜ乍らの解説が、分り易くて、面白くて、文字を追ううちに、一気に読み終えてしまいました。誰もが区別なく心地好く、使えるデザインってことで、間違ってますませんか?デザインを楽しむんですよね..

“若き日に机を並べた親友に、この年になって教わろうとは”

エッセイストで I A U D 会員の松森果林氏より

ユニバーサルデザインがこんなに楽しく、頼もしく、愉快だと思えた本は初めてだ。

超高齢社会の現代、誰もが使いやすい商品やサービスを生み出すことは容易ではないが、著者はそのヒントが日本文化にあると説いている。障子は家族の存在を感じ合いながら暮らせる「気配の文化」。江戸前寿司は一口で好きな量だけ食べられる「UD 食品」。言われてみると、なるほど説得力がある。私たちは、デザインについては客観性を持って語ることができるが、感覚的な心地よさや使いやすさについては一人一人違うため理解しにくい。けれども、そうだ、日本は本来、五感に訴える心地よさや楽しさを、最上のもてなしとして供してきたのではなかったか。その先に、常に「幸せな人の姿」を描いていたからこそ育まれた文化だとこの本は教えてくれる。それはそのまま UD にもつながる。日本の技に、心を伴うことでゆるやかに成立するユニバーサルな社会。私たちが忘れかけていたことをあらためて問い直させ、実用的なことはもちろん、「UD は楽しくあらねばならない」という著者の信念が納得できる一冊である。

Newsletter では、誌面を会員の皆さまの UD に関わる情報交換の場と位置づけています。ぜひ、会員企業の UD 商品開発事例や PJ/WG の活動成果事例等の情報をお寄せ下さい。また、国内外の UD 関連イベント、シンポジウム等の開催情報もお寄せ下さい。ご連絡は、news@iaud.netへ直接、メールをお送りいただくか、事務局あるいはサロンへお問い合わせいただいても結構です。

無断転載禁止

IAUD Newsletter No.2
2008 年 5 月 30 日発行
国際ユニヴァーサルデザイン協議会

事務局:225-0003 横浜市青葉区新石川 2-13-18-110
電話:045-901-8420 FAX:045-901-8417
e-mail:info@iaud.net
IAUD サロン:104-0032 東京都中央区八丁堀 2-25-9
トヨタ八丁堀ビル 4 階
電話:03-5541-5846 FAX:03-5541-5847
e-mail:salon@iaud.net